

# 医心 伝心

## 光る原石を見つける力

県医常任理事 長谷川 徹

年の瀬も押し迫り、慌ただしい日々が続きます。今年には年頭から、ジャンプの葛西紀明選手やフィギュアスケートの羽生結弦選手など、輝かしい光を放つ逸材が登場しました。葛西選手は、最初は荒削りな原石であったかもしれませんが、長い長い年月をかけて持てる力を磨き上げ、凡人であればピークを過ぎたと思われるような年齢に達して初めて自ら光り輝く存在になりました。羽生選手は、10代という若さで世界の頂点に立つ輝きを放ちながら、逆境をバネにして克己する強い精神力を身につけ、これからも自らをチャレンジャーと称することで更に羽ばたこうとしています。

彼らのかいた汗や流した涙はとても知る由もありませんが、その周りにはきっと、才能を見出し、可能性を信じて支え育てる人々がいたと思います。私は、逸材といわれる方々ご自身にももちろん尊敬し称賛を惜しみませんが、名声の陰に隠れながらも下支えを尽くしてこられた方々に、心からお祝いを贈りたいと思うのです。

一方今年には、原石と信じて磨きをかけたのに、実際は光りも輝きもしない凡材だった、という残念なニュースも多かったと思います。STAP細胞の小保方氏や聴覚障害（偽）の作曲家、佐村河内氏などがそうです。もちろん、この原稿を書いている時点で彼らの不実が明らかになったわけでは

なく、本当にSTAP細胞が存在したり、自らの力で素晴らしい楽曲を作曲したりされないとは限りません。そうあってほしいと願う気持ちもありません。しかし、彼らと前述の逸材との間に共通することは、本物かどうかは原石の時点では周りの人々にも（ひょっとすると本人にも）わからない、ということです。

「理研」といえば「利権」、という漢字が思い浮かんでしまいますが、理化学研究所の人々や、クラシック音楽の業界で新たなスターの登場を待ちわびていた人々にとっては、小保方氏や佐村河内氏はまさに光るはずの原石であったと思います。あれほどのニュースになるまでには、本人たち以上にいろいろな思惑を絡めて「祭り上げた」族が沢山いたはずです。そういった人々は今、輝きを失って転がっている石ころを見て何を想っているのでしょうか。

私達医療界にも、課題や懸案が沢山あります。美しい輝きを放ち、人々の健康というフィールドを暖かい光で包んでくれる、そんな逸材がいたらと、みんなが思っています。「光る原石を見つける力」を養いたいものです。